

日本語対人コミュニケーションにおける 「言いさし」表現の受け手側の判断と解釈

川上 知津[†]

The recipient's judgment and interpretation of "Iisashi" expressions (Non-predicate Sentences) in Japanese interpersonal communication

Chizu Kawakami

1. はじめに

日本では少子高齢化が大きな問題となっており、若手労働者不足を外国人人材に求めようとしている。「留学生30万人計画」(文部科学省, 2008) [1] は、2017年に達成し、新型コロナウイルス禍が落ち着いたところでの受け入れ再開施策「令和4年3月以降の外国人留学生の新規入国の緩和措置について」(文部科学省, 2022) [2] も出された。

筆者は、外国人と共に働いた経験を持ち、現在日本語教師として外国人留学生に接している。日本に入学して間もない外国人は、「お客様、申し訳ございませんが…」というような丁寧な「言いさし」表現に戸惑う。途中で終わったように感じられ、何をすればいいのか困惑する。日本人側が、それを理解するのが「当然、当たり前」として見てしまうと、コミュニケーションや人間関係のトラブルになりかねない。

そこで日本人のコミュニケーションに頻繁に使用される「言いさし」表現に着目し、実際のコミュニケーションではどのように受けとめられているのかを調査し、問題点を明らかにすることを本研究の目的とした。また日本人間でも、理解の齟齬があるかどうか確認したいと考えた。

2. 日本のコミュニケーションの特徴

2.1 日本のコミュニケーション

日本は一般的に「高コンテキスト文化」(ホール, 1976 = 1993) [3] とされており、コミュニケーションにおいて、思っていることを全部言わずにコンテキストに依存して理解し合おうとする傾向にある。この「言わない」部分のある表現として「言いさし」を取り上げる。

2.2 「言わない文化」について

日本では「言いさし」表現を多用する「言わない文化」

が継承されており、「言わなくてもわかるのが当たり前」と考えられがちである。それは古家 (2013) [4] が「他者配慮や人間関係を含めてコンテキスト重視のコミュニケーションである」としている「以心伝心」「阿吽の呼吸」「遠慮と察し」「甘え」「ホンネとタテマエ」が影響していると考えられる。他に「学校教育」「時短」等も関係するのではないかと筆者は考えている。

日本では小学校入学から高校卒業まで、集団形式の学校生活が家庭生活より長くなる。その教育は文部科学省の告示する「学習指導要領」に沿って実施されるため、皆同様の内容のものになりやすい。「以心伝心」「察し」ができることを良しとする風潮が生まれやすいとも考えられる。このことは、このような背景を共有していない非日本語母語話者にとっては適切にやり取りできない原因となり得る。

また日本で特にビジネスのシーンで求められる時間の節約「時短」が、コミュニケーションにおいても良しとされ、「当然わかるだろう」と考えられることは省略され「言いさし」表現が多用されると考える。一方、先に述べた通り、日本語非母語話者にとってはこのように省略された「言いさし」表現は理解が難しいと思われる。

3. 日本語における「言いさし」表現の研究

3.1 「言いさし」について

「言いさし」の具体的な例としては、次のようなものが代表的である。

運のわるいことに、落ちた場所に大きい石があったそうじゃ。傷は一生…。[5]

この場合「傷は一生」の後、動詞を含めた述部が表現されていない。この後「残る」という言葉を核とした表現があると考えるのが妥当であろう。女の子の額に傷が残ると

[†]2022年度修了 (人文学プログラム)

日本語対人コミュニケーションにおける
「言いさし」表現の受け手側の判断と解釈

いうマイナスな仮定の明言を避けるために「言いさし」表現を用いていると考えられる。

本研究では先行研究等を参考に「言いさす」の意味にある「途中でやめる」という点を重視し「言いさし」の定義を、「形式上、主部を伴わずに従属節のみで表現される文、もしくは文の中で述部が省略されるもの」とする。その定義に先立ち、辞書等の既定の定義を参照した「文」の定義を「一まとまりの思想内容を言葉によって表現し、完結したもの」をとする。

3.2 「言いさし」の先行研究

「言いさし」表現、もしくは「中途終了発話」についての先行研究は、宇佐美 (1995) [6], 荻原 (2008) [7], 朴 (2008) [8], 白川 (2009) [9], 高木 (2012) [10], 田 (2016) [11], 三牧 (2015) [12] などがある。今回、白川 (2009) と朴 (2008) の分類を参考に研究調査を行った。

3.2.1 白川 (2009) の分類

白川 (2009) は「言いさし」を「言い残し」と「言い尽くし」, 「関係付け」に分け、そのうち「言い尽くし」, 「関係付け」に属するものを研究対象としている。

表1 言いさし文の類型 [9]

	関係付け	言い尽くし	言い残し
主節の非存在	+	+	+
発話内容の完結性	+	+	-
関係づけられるべき 事態の文脈上の存否	+	-	-

(白川, 2009, pp. 11)

3.2.2 朴 (2008) の分類

朴 (2008) は接続助詞で終わる「言いさし」表現を分析し、その中で出現頻度が高い「けど」「から」についての7つの用法を示している。

「けど」について

- 用法1: 「誘い」や「申し出」等の働きかけをする用法
- 用法2: 「断言」を和らげる用法
- 用法3: 自分の意見をほかすための曖昧な用法

「から」について

- 用法4: 依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法
- 用法5: 原因・理由を表す用法
- 用法6: 話し手が自分の意志を告知する用法
- 用法7: 情報を提示する用法

本論では、朴 (2008) の用法を基本に会話の送り手側の表現を14項目作成し、白川 (2009) の分類の中での「言い残し」と「言い尽くし」の、どちらに判断されているかを調査した。また「言い残し」があるとすれば、どのよう

な内容か記述してもらった。朴 (2008) は「けど」「から」を中心に分析しているが、本研究は他の形も加えた。

4. 質問調査

4.1 調査内容

まず、設問として「会話の中で、相手が、次 (1~14) のように言いました。〈 〉に言わなかったと思う言葉や文があると思ったら、下線〈 _____ 〉に書いてください。ないと思う場合は、×を書いてください。分からない場合は?を書いてください。」という提示をし、例題を示した。

例) . (友達をカラオケに誘ったら) 「行きたいけど、バイトがあるから〈 _____ 〉」

a. 言わなかったと思う言葉や文があると思う場合:

〈 行けない 〉

b. 言わなかったと思う言葉や文はないと思う場合:

〈 × 〉

c. 言わなかったと思う言葉や文はありそうだが、分からない場合: 〈 ? 〉

次に以下の項目文を提示した。

1. 「今度の日曜日のコンサートのチケット、もらったんだけど〈 _____ 〉」
2. (お店の人から) 「こちらは、100個限定の商品ですから〈 _____ 〉」
3. (顔の怪我を見せて) 「自転車で転んだんだ。お医者さんが、傷は一生〈 _____ 〉」
4. 「授業中にケータイ使っちゃいけないってルール、わかるんだけど〈 _____ 〉」
5. (飲み会が終わって別れるとき) 「じゃ、私は自転車で帰りますから〈 _____ 〉」
6. (レストランで) 「お客様、こちらの席は禁煙となっております〈 _____ 〉」
7. (仕事中に) 「先輩、もう予定のミーティングが始まるみたいですけど〈 _____ 〉」
8. 「雨が降り出したね。私、車で来ているから〈 _____ 〉」
9. 「お父さん、空港のトイレに財布忘れたんだって。見つからないとは、言わないけど〈 _____ 〉」
10. (先生から) 「昨日レポートの締切日でした。あなたは、提出していませんから〈 _____ 〉」
11. (職場で同僚から) 「また間違ってますね。その計算が合わない、私〈 _____ 〉」
12. (お金を借りている人から、貸している人に) 「来月、必ず、返すから〈 _____ 〉」
13. (電話の会話の終わりに) 「では、よろしく、お願いします。失礼ですが〈 _____ 〉」
14. (アルバイト先で、同僚から) 「店長は、今日、機嫌が悪いから〈 _____ 〉」

上記の14項目を朴 (2008) の分類で分けると以下のようになる。

用法1:「誘い」や「申し出」等の働きかけをする用法

1.と8.

用法2:「断言」を和らげる用法

3.と9.

用法3:自分の意見をほかすための曖昧な用法

4.と11.

用法4:依頼、勧誘など相手に対して働きかける用法

2.と13.

用法5:原因・理由を表す用法

6.と10.

用法6:話し手が自分の意志を告知する用法

5.と12.

用法7:情報を提示する用法

7.と14.

また白川(2009)の分類では、5.と7.及び14.が「言い尽くし」で他11項目は「言い残し」になる。

4.2 予備調査について

事前に予備調査を質問紙とGoogle Formsで実施した。筆者の家族、友人、知人計8名(全て日本人母語話者。女性:7名(20代1名, 50代5名, 60代1名), 男性:50代1名)に回答を依頼し全員から回答を得ることができた。予備調査では、全員母語話者であるため< ___?___ >(何かありそうだが、分からない)は、選択肢に加えなかった。

結果として、50・60代女性は「言い尽くし」の回答はなく、< _____ >に全て言葉や文が記述されていた。50代男性は6項目、20代女性は8項目を「言い尽くし」として判断し< ___×___ >を記入していた。

4.3 本調査についての予測

予備調査の結果から次の予測を立てた。

(1) 1.については、予備調査で8名中7名が「誘い」と解釈しているので、同様な結果がでるのではないかと。

(2) 8.についても、予備調査で7名が「申し出」と解釈しているので、同様な結果が出るのではないかと。

(3) 3.と9.は「断言を和らげる」という曖昧さの強いものであるため、特に非母語話者の留学生には分かりにくいのではないかと。

4.4 本調査について

本調査は次の通り実施した。

調査期間:2022年7月11日~9月20日

調査対象:外国人留学生と日本人学生で「Z世代」(1990年代後半以降に生まれた世代)にあたる協力者を対象とし

た。筆者の勤務する短期大学と日本語学校、及びその日本語学校の関係校や卒業生に依頼をした。また研究指導員の関係者、所属ゼミのメールグループメンバーにも依頼し、筆者のSNSアカウントも利用した。

「Z世代」を対象としたのは、日本人学生は「ゆとり世代」でもあり、前職(小学校外国語活動)で関わった世代で興味を持っていることと、「学生」に年齢幅があり社会経験があると「言いさし」表現にも慣れている可能性があると考え、今回は社会経験が少ない人々を対象にしたかったからである。また留学生は比較的日本人学生より年齢が高くなることもあり、調査対象者の年齢幅を18歳~28歳に設定した。

調査方法:授業内で「質問調査紙」の配布をすると共に、授業外でも回答が可能になるようにGoogle Formsの配信を行った。

4.5 本調査の回収結果

「質問調査紙」とGoogle Formsを合わせて日本人学生(母語話者)41名、外国人留学生(非母語話者)23名から回答を得た。同意書に確認マークのないもの、29歳以上の回答者のもの、属性が全く記入されていないもの、及び母語話者で項目を質問と捉えて答えたと考えられるものを無効としたため、有効回答数は日本人学生(母語話者)37名、外国人留学生(非母語話者)22名となった。外国人留学生の国別人数は、ベトナム:14名、中国:4名、韓国:1名、モンゴル:1名、ネパール:1名、香港:1名であった。

5. 分析と考察

5.1 調査結果の分析

表2の集計表は、4.1で述べたように質問調査の14項目を朴(2008)の用法分類に沿い分け、白川(2009)の「言い尽くし」にあたる項目に■をつけたものである。数値は、各回答において< _____ >に記入された「記述」「×」「?」の数を上段に記し、その合計に対する百分率を下段()に記した。

最初に各項目への回答として調査票の< _____ >に記されていた内容を機能別に分類した¹⁾。その上で「合致率」(予め各項目に対して設定した用法・分類と調査協力者の回答とが、どれだけ合致したかを百分率で表したもの²⁾)が65%以上のものを「高」、35%以上65%未満のものを「中」、35%未満のものを「低」と捉えた。

¹⁾ 例えば、項目1.「今度の日曜日のコンサートのチケット、もらったんだけど< _____ >」は「誘い」や「申し出」等の働きかけをする用法としている。< _ >に「行きませんか」「一緒に」という記述のあるものを「誘い」、「1枚いる?」という「チケットが欲しいか」尋ねるものを「申し出」と捉え、それ以外の記述(「バイトがあって行かれません」などを「行けない」として調査回答の記述を分類した。他13項目の記述も同様な形で分類した。

²⁾ 例えば先の例では「誘い」及び「申し出」に分類されたものが回答数の中で何パーセントあったかを計算して「合致率」とした。

日本語対人コミュニケーションにおける
「言いさし」表現の受け手側の判断と解釈

表2 質問調査回答の集計表

	分類	誘い・申し出		断言和らげ		ぼかし		依頼・勧誘		原因・理由		意志告知		情報提示	
	項目	1	8	3	9	4	11	2	13	6	10	5	12	7	14
日本人学生	記述	32 (86)	27 (61)	30 (81)	13 (39)	22 (59)	14 (40)	22 (59)	9 (25)	18 (50)	29 (81)	22 (59)	19 (53)	18 (50)	21 (58)
	×	5 (13)	5 (14)	1 (3)	8 (22)	1 (3)	2 (6)	7 (18)	3 (8)	13 (36)	0 (0)	12 (32)	15 (42)	13 (36)	9 (25)
	?	0 (0)	4 (11)	6 (16)	15 (42)	14 (38)	19 (54)	8 (21)	24 (67)	5 (14)	7 (19)	3 (8)	2 (6)	5 (14)	6 (17)
	合計	37	36	37	36	37	35	37	36	36	36	37	36	36	36
外国人留学生	記述	20 (91)	15 (75)	15 (71)	12 (63)	18 (86)	16 (76)	14 (67)	10 (53)	16 (80)	17 (81)	15 (71)	16 (80)	9 (45)	16 (80)
	×	2 (9)	3 (15)	3 (14)	4 (21)	2 (10)	4 (19)	4 (19)	4 (21)	3 (15)	3 (14)	3 (14)	3 (15)	10 (50)	2 (10)
	?	0 (0)	2 (10)	3 (14)	3 (16)	1 (5)	1 (5)	3 (14)	5 (26)	1 (5)	1 (5)	3 (14)	1 (5)	1 (5)	2 (10)
	合計	22	20	21	19	21	21	21	19	20	21	21	20	20	20

5.2 質問調査の考察

ここでは母語話者（37名）と、非母語話者で学習歴が5年以上の者（9名）の「合致率」を比較する。合致率の差が4%以下の場合を「差がない（同等）」とし、それ以上の差を「差がある」とした。

5.2.1 [日本人学生]>[学習歴5年以上の非母語話者]の項目

1.と8.（用法1）、3.（用法2）、13.（用法4）、5.（用法6）、7.と14.（用法7）の7項目となった。1.は、最も母語話者と非母語話者の間で差が大きいものとなった。（86%：56%）8.も両者の差が大きかったが56%：33%で合致率が下がった。「誘い」や「申し出」の働きかけや、「から・ので」を使用した「言い尽くし」は学習歴が長くなっても判断・解釈が難しいと考えられる。

5.2.2 [日本人学生]=[学習歴5年以上の非母語話者]の項目

2.（用法4）と10.（用法5）の2項目となった。学習歴5年以上の非母語話者と学習歴5年未満の非母語話者を比較すると、2.は14%、10.は24%の差がある。10.においては日本語学習歴が長いと留学期間も長くなり、教師からの「言いさし」表現に接する機会が増え、解釈がしやすくなったと考えられる。

5.2.3 [日本人学生]<[学習歴5年以上]の項目

9.（用法2）、4.と11.（用法3）、6.（用法5）、12.（用法6）

となった。「母語話者間でも理解の齟齬があるのではないか」という予想に対して該当する結果が出たとも捉えられる。最も差が大きかったものは11.で40%：78%であった。留学生に配慮して設定した回答選択肢「？」（言わなかったと思う言葉や文はありそうだが、分からない）だったが、母語話者全体の54%にあたる19名が、この項目に対して使用していた。

5.2.4 予測の結果

4.3で立てた予測の結果は次のようになった。

(1) 1.については、予備調査で8名中7名が「誘い」と解釈しているの、同様な結果が得るのではないかと。

➡母語話者は予想通り81%の割合で「誘い」と解釈していたが、非母語話者で学習歴が5年以上でも56%にとどまった。

(2) 8.についても、予備調査で7名が「申し出」と解釈しているの、同様な結果が出るのではないかと。

➡母語話者は17%、学習歴5年以上の非母語話者は33%の割合で「申し出」と解釈していた。母語話者の39%は「誘い」と解釈しており「誘い・申し出」の用法として捉えても56%にしかならなかった。

(3) 3.と9.は「断言を和らげる」という曖昧さの強いものであるため、特に非母語話者の留学生には分かりにくいのではないかと。

➡3.は母語話者の78%、学習歴5年以上の非母語話者の56%が「断言の和らげ」と解釈しており、9.は母語話者の31%、学習歴5年以上の非母語話者の56%が「断言の和らげ」と解釈していた。9.は母語話者の15名が「？」で回答していた。

本調査の結果が予備調査からの予測と一致しなかった原因については今後の研究課題である。

6. まとめ

今回の調査では、5.2.1で述べたように「誘い・申し出」の働きかけや、「から・ので」を使用した「言い尽くし」は学習歴が長くても判断・解釈が難しく、今後日本で人口の割合が増加していく非母語話者に対して使用する場合に注意が必要と考えられる。

また母語話者には「言いさし」表現を使用している意識が薄いと見られ、母語話者間でも理解の齟齬が発生することを認識してコミュニケーションを取らなければならないと考える。

そして現在の日本の「日本語教育」、及び、特に「国語教育」は全く「言いさし」表現を取り込んでいないことに問題を感じた。異文化コミュニケーションの観点から、日本語コミュニケーションに「言わない」で伝えようとしていることがよくあることを、母語話者の日本人が知っておかなければならないと考える。

謝辞

本研究に当たり指導教官の大橋理枝先生に多大なるご指導を頂いた。また質問調査協力者の皆様、ご助言くださった方々のお陰で論文研究ができたことを厚く感謝する次第である。

文献

- [1] 文部科学省 (2008) 「留学生30万人計画」骨子の策定について
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm (2022年12月11日参照)
- [2] 文部科学省 (2022) 令和4年3月以降の外国人留学生の新規入国の緩和措置について
https://www.mext.go.jp/content/20220302-mxt_kouhou02-000018769_1.pdf (2023年2月11日参照)
- [3] ホール, エドワード T (1976) 岩田慶司・谷泰訳 (1993) 『文化を超えて』TBSブリタニカ
- [4] 古家聡 (2013) 「日本のコミュニケーション」石井敏・久米昭元 (編集代表) 『異文化コミュニケーション事典』春風社 (pp. 391)
- [5] NHK連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」第25回 (2021年12月3日放送) 藤本有紀脚本
- [6] 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』通号662光葉会 (pp.27-42)
- [7] 荻原稚佳子 (2008) 『言いさし発話の解釈理論』春風社
- [8] 朴仙花 (2008) 「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—「けど」「から」を中心に—」『言葉と文化』第9号 (pp.253-270)
- [9] 白川博之 (2009) 『「言いさし」表現の研究』くろしお出版
- [10] 高木丈也 (2012) 「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる「中途終了発話文」の出現とその機能」『社会言語学』第15巻1号 (pp.89-101)
- [11] 田昊 (2016) 「日本語教育文法における「言いさし」の研究」『一橋大学審査博士学位論文』
- [12] 三牧陽子 (2015) 「言いさしに見られるポライトネス」『日本語学』34 (7) (特集 ことばを言いさすとき) (pp.26-37)